

## アフリカ研究の二つの立場——●坂 本 慶 一

(福井県立大学学長)

私はアフリカの農業問題に関心を抱いている。日本ではアフリカの農業に関心を持つ人は少数派である。中でも、アフリカ農業を単に認識するだけでなく、それを何とかしたいと考えて研究している人は、もっと少ないと思う。対象を客観的に認識することは科学の領域であるが、何とかしたいと考えることは主観的な価値の領域である。研究者は価値判断を科学的認識に優先させてはならない。アフリカニストの多くは、アフリカを科学的認識の対象として研究しているのであって、アフリカを何とかしなければと考えて研究しているのではなからう。何とかしなければと考えるのは大それたことであり、研究者の常道を踏み外しているのかも。しかし……と、さらに私は自問しつづける。

上のようなこだわりを、ことアフリカに関する限り、私は絶えず抱きつづけている。「なぜアフリカを研究するか」と問われて、「面白いから」とか、「アフリカがそこにあるから」などとは、どうしても私には答えられない。こうしたこだわりは、私のアフリカ研究の動機と深く結びついている。

1978年に、当時のザイル大学総長チバング氏が京都大学を訪問し、河合雅雄・伊谷純一郎・米山俊直氏らとの私的会食のさい、「日本のサル学者や人類学者がわが国を訪れることを歓迎する」と述べた後、「しかし、わが国に役立つ研究もしてほしいものだ」とつけ加えた。ある事情でその場に居合わせた私は、「ザイルにとって役に立つ研究とは何か」と尋ねた。チバング氏は答えた。「もちろん農業です。農業はザイル最大の問題です。」私がアフリカ研究を志したのはこの言葉によってである。

役に立つか立たないかという設問をアカデミズムは拒否する。認識が至上である。そこでは認識する者とされる者とは峻別される。研究者は研究対象の運命を気遣う必要はない。一方、役に立つか立たないかの観点は、研究者と研究対象との間の不断の対話を前提とする。この観点に立つ研究者は、対象の運命に無関心ではおれない。晩学のアフリカ研究者である私は、これまでアフリカ調査を5回行なったが、志に反して役に立つような成果を挙げていない。もはや現地調査の機会もないが、それでもなお、アフリカ人の幸と不幸に深い関係を持つアフリカ農業の研究を通して、彼らとの対話をつづけたいと考えている。